

野鳥は島の宝物

バード・アイランド三宅島

日本野鳥の会 篠木秀紀

国の天然記念物に指定されているアカコッコやカンムリウミスズメなど、希少な野鳥が数多く生息している三宅島。村では日本野鳥の会と協力し、野鳥たちとの共存をテーマに島づくりが進められてきた。「野鳥は島の宝物」という声かけのもと、島の人たちも自ら自然観察のガイドになり、観光誘致へとつなげているバード・アイランド三宅島の今を伝える。

野鳥を楽しむ自然愛好家であるバードウォッチャーにとつて、島は特別な場所です。それは島の閉鎖的な環境の中で育まれた、珍しい野鳥と出会えるからです。三宅島は国内屈指の野鳥の宝庫であり、バード・アイランドとも呼ばれています。この島では野鳥を資源として持続可能な形で観光に活用し、バードウォッチャーを誘致する活動を行っています。その取り組みをご紹介します。

バード・アイランド三宅島

伊豆諸島・三宅島は東京から約一八〇キロメートルの太平洋上にある周囲約三八キロメートルの火山島です。三宅島は二〇年に一度のペースで噴火している非常に活発な火山で、島の随所に火山景観が見られます。また、貴重な照葉樹林や南方系の海水魚やサンゴ、そして希少な野鳥が数多く生息する、自然観察の好ポイントとして知られています。



三宅島で一番のバードウォッチングスポット、大路池。

二〇〇〇年噴火により三宅島の環境は大きく変貌しました。噴火によって山頂部が大きく陥没して大量の火山ガスが発生し、森林は約六割の地域で影響を受けました。しかし自然の回復は早く、現在では緑も徐々に増えてきています。また風下になり難しい地域は火山ガスによる森の消失を免れて、噴火以前と比べても遜色ない森が残りました。そこには以前と同様に多くの野鳥が暮らしています。バード・アイランドは健在です。

三宅島がバード・アイランドと呼ばれる理由は、島の南部にある周囲約一・六キロメートルの火口湖・大路池たしろいけを歩いてみると分かります。ここは火山ガスの影響が少なく、スタジイやタブノキの深い森があり、鳥たちの格好の棲み処となっています。三宅島の鳥・アカコッコをはじめとする固有の鳥たちが数多く生息しています。驚くべきことは鳥たちの生息密度とそのさえずりの量です。森を歩けば春から初夏にかけてはさえずりが降り注いでくるかのようにです。この野鳥の密度の高さ、とくに絶滅危惧種と呼ばれる希少な野鳥の多さが大きな特徴です。

アカコッコは全長二三センチメートル程度のツグミの仲間、お腹の赤と黒い頭に目の黄色い縁取りが特徴のかわいらしい鳥です。この鳥は男女群鳥とトカラ列島、伊豆諸島のみを生息、国の天然記念物で絶滅危惧種にも指定されています。三宅島にはアカコッコを含めて国の天然記念物



代表アカ
カウ鳥を
島を
三宅
する
コッ

られています。とくに三宅島には雛や卵を捕食するヘビが
いません。他の伊豆諸島の島には分布しているため、元々
は生息していましたが、過去の大きな噴火の際に絶えたと
されています。

度重なる噴火による攪乱や黒潮による温暖な気候、そし

が四種、絶滅危惧種
八種が繁殖していま
す。この規模の島で
これだけの希少な鳥
たちが繁殖している
ことは非常に珍しい
ことです。

希少な鳥たちが、
なぜ三宅島に高密度
に生息しているの
か？ はつきりした
要因は分かっています
せんが、温暖な気候
や良好な照葉樹林が
残っていること、そ
して天敵となる生物
が少ないことなどが
影響していると考え

て海で隔絶された島での独自の進化、様々な要因が複雑に
絡みあった結果、野鳥には絶妙なバランスが築かれて、パ
ード・アイランドと呼ばれるほどの豊かな鳥類相が育まれ
たのでしよう。

島では当たり前 野鳥や自然を貴重な資源として

この三宅島のすばらしい野鳥との生息環境を守りたいと、
日本野鳥の会は一九八〇年代から三宅村に対して保護の必
要性を訴えていました。これを受けて村も野鳥を守り、観
光で活用するためのサンクチュアリ（野鳥の聖域）の基本構
想がつけられました。しかし、米軍の夜間離発着訓練場計
画や、民間大手資本によるリゾート開発計画が持ち上がり、
島は自然保護と開発の間で揺れ動きました。最終的に三宅
村は、開発で豊かな自然を失うことより、自然を活かした
特色ある観光を選択したのです。島の自然を活かした観光
推進を決意した三宅村と、野鳥を守りたいと訴え続けた当
会との協力で、一九九三年「アカコッコ館」が開設され、
バード・アイランド三宅島がスタートしました。

アカコッコ館は自然観光の推進拠点として大きく期待さ
れていました。運営には三宅島在住の海洋学者、故ジャッ
ク・モイヤール氏も携わり、春から初夏にかけてはバードウ
ォッチング、夏にはフィッシュウォッチングに星空観望会、

草花観察会と多種多様なテーマのイベントを年間合計七〇回以上も実施しました。専門家の常駐と、多様なプログラム展開によって旅行者へのサービスは向上しました。一方、オープン当時は村民にとって島の野鳥や自然は当たり前前の存在すぎて、関心は高くはありませんでした。そこでアカコッコ館では、村民向けに観察会、コンサート、企画展、小中学校への出前授業などを実施し、島の野鳥の魅力や価値の普及に努めました。

大きな転機となったのは、一九九八年の設立五周年記念事業として「エコツーリズムと島の鳥」をテーマに国際シンポジウムを開催したことでした。七ヶ国から六九七名の参加があり、多くの研究者や専門家が集まる村をあげての大イベントとなったのです。これを経て、アカコッコの島・三宅島は村民の中でも確固たるものになったのです。



三宅島の自然観光の拠点施設「アカコッコ館」。

火山にまけない、野鳥による三宅島復興作戦

順調に活動は進んでいたと思われていた二〇〇〇年、噴火が起きました。三宅島の産業は大きなダメージを受け、アカコッコ館も五年間の休館を余儀なくされました。帰島後の地域復興の策として観光への期待は大きかったのですが、火山ガスの影響により一般来島者が激減してしまう厳しい状況でした。そんな中で、バードウォッチャーからはアカコッコ館の再オープン前から「いつから行っているの？ アカコッコはいまもいるの？」と多くの問い合わせがありました。また一般の来島が許可された直後からバードウォッチャーが他の観光客に先んじて訪れていたのです。

そこで、これまでも増して野鳥による観光客誘致が注目さ

れました。火山ガスの被害が少ない大路池には、野鳥のさえずりが溢れていました。観光の素材としても申し分ないものです。「野鳥で島を元気にしたい！」との思いも強くなり、野鳥による三宅島の復興を目指し、バードウォッチャーを誘致する新たな挑戦がはじまったのです。

「バードウォッチャーに優しい島」を支援する取り組みの数々

①定期航路・東海汽船の日本野鳥の会会員割り引き

三宅島への主要な交通手段である定期航路。日本野鳥の会から運営会社の東海汽船に働きかけて協力を得て、多くのバードウォッチャーが所属する日本野鳥の会会員一〇パーセント割り引きサービスを用意しました。噴火後の二〇〇七年より開始し、帰りの航路では船上から海鳥の観察もできるため、バードウォッチャーには好評です。

②三宅島「鳥パス」を設定

島内を一周する村営の路線バスを使い、もっと安価にバードウォッチングを楽しめるように、村営バスのフリーパス、アカコッコ館入館券、村営温泉施設入館券のセット「三宅島鳥パス」を販売しました。アカコッコ館が企画し、三宅村によって実現したこの取り組みは、とくに個人客に好評でした。

③バードウォッチャーの宿・日本野鳥の会の協定旅館

日本野鳥の会の会員であれば宿泊料金の割り引きを受けられる協定旅館が二軒あります。どちら

乗のバスは好評だ。にだはオッパ「鳥ウォッチャー」が乗った。



でもオッパアカコッコ朝5時バードウォッチャーわうわ館。



の宿も帰島後に協定旅館に登録し、バードウォッチャーに向けたさまざまなサービスを提供しています。宿には順調にバードウォッチャーが訪れています。

④「アカコッコ館」特別早朝五時開館

バードウォッチングのハイシーズンである五月～六月の土、日曜日は、定期船の到着に合わせて早朝五時に開館しています。公営施設としてはとても珍しい試みです。島に到着すると、多くのバードウォッチャーはすぐに観察をはじめます。早朝にアカコッコ館で島内の鳥について最新情報が入手できるようになり、バードウォッチャーからは好評です。

魅力的な メニューの提供

①希少種カムリウミスズメのエコツアー

海鳥であるカムリウミスズメを見るエコツアーです。推定個体数五、六〇〇羽程度と海鳥としては極めて少ない、バードウォッチャー憧れの鳥です。日本野鳥の会では三宅島を拠点として一九九五年から保護のための調査活動を行っており、カムリウミスズメの保護と資源化の両立のために、エコツアーを試行してきました。

遊漁船を使うため漁協や漁師との交渉や、観察ルールについて協議を重ねて実現しました。募集を開始するとすぐ



カムリウミスズメを漁船から観察するエコツアー。

らのメッセージ



■北川洋夫さん

(漁師、北洋丸船長、
カムリウミスズメのツアー、
調査に協力)

子どものころにはカムリウミスズメはたくさんいたよ。カムリウミスズメは飛んでも、泳いでも動きが可愛いよな。あいつは特別だよ。心配なのは生態系が変わっていること。昔に比べれば魚も鳥も少なくなったよ。自然があっての人間だし、自然がなくちゃ人間は生きていけないよ。調査に関わっているのも、増減が気になるし、何で減っているのか知りたいんだよな。カムリウミスズメのツアーはおもしろいよ。カムリウミスズメ見れると、お客が興奮しているもんな。嬉しいもんだよ。ツアー1回で50羽ぐらい最低見せない俺も満足できないよ。鳥のために俺ができることは何でもやってくつもりだよ。



■島村幸明さん

(三宅村役場観光振興課長)

三宅島は、陸のアカコッコ、海のカムリウミスズメとバードウォッチャー垂涎の希少種に出会える自然豊かな島です。しかし、2000年の噴火では全住民が島外避難を余儀なくされた厳しい自然条件の下にあります。三宅島の豊かな自然は、その美しさで人々を魅了しますが、一方で冷酷な厳しさで迫ってきます。先人たちは、知恵と勇気をもって幾多の試練を乗り越えてその自然の恩恵を受け止めてきました。本村では、三宅島型エコツーリズムの実現を目指して、アカコッコ館を中心として野鳥だけでなく、火山島としての三宅島の特徴を活かしたさまざまなテーマのソフトづくりが進められています。その中でもとくに自然ガイドの養成をはじめとする人材育成事業が急務です。三宅島の観光における最大の資源は自然です。その資源をどのように活用していくかが、島おこしの鍵だと考えています。

に定員が埋まり、申し込めなかったお客さんが翌年まで待って参加するケースもある人気のツアーとなりました。二〇一〇年からは民間のガイドツアーが始まり、主体はそちらに引き継がれています。

②日本一のさえずりの小径キャンペーン
二〇〇九年から開始したキャンペーンです。五月〜六月の土曜日はすべて、レンジャーがガイドする大路池バードウォッチングを実施しています。バードウォッチングの初

三宅島住民か



■穴原美奈さん

(自然ふれあい友の会メンバー)

私は家族とアカコッコ館の自然観察会に参加したことがきっかけで、三宅島独特の興味深い野鳥の世界に引き込まれました。三宅島の野鳥たちは火山島の恩恵を何らかの形で受けて、生き生きとした暮らしを営んでいます。私は魅力あふれる三宅島の自然環境と野鳥たちを多くの皆さんとやさしい気持ちで満喫したいです。そのために島の自然を愛する人たちが組織する「三宅島自然ふれあい友の会」の活動をおとして、大路池の森や海岸のゴミ拾いをしたり、ゴミ問題についての意見交換をして日常生活からゴミを減らす工夫を一緒に考え、取り組んでいます。自然豊かな三宅島を大切にすることからきつと、かけがえのない地球を守る姿勢が見えてくるのではないのでしょうか。



■野田博之さん

(民宿経営、
ダイビングインストラクター、
自然ガイド)

野鳥のシーズンは今まではうちの宿にとって閑散期のような感じでした。昔から三宅島はバードアイランドだし野鳥に興味はあったけど、本格的に取り組みはじめたのは噴火後です。ダイビングと両立できる新しいメニューがほしいと思っていました。島では商業ベースで野鳥を扱っている人もいないので、もったいない、開拓したいという思いもありました。帰島後に日本野鳥の会の協定旅館に登録して、今年からカムリウミスズメのツアーもはじめました。新鮮でおもしろいですよ。鳥のお客さんは少しずつ増えています。バードウォッチャーのことも分かってきたので、新しいサービスをつくっていきます。

心者や経験がない人でも、三宅島の魅力を体験してもらえ
るプログラムです。また野鳥の保護と安心して観察できる
よう大路池への車の乗り入れ規制を二〇〇九年から行って
います。

③村民自然ガイドが島内を案内

三宅島の野鳥や自然を体験するプログラムは、アカコッコ館のレンジャーだけでは数が限られます。そこで村民を対象に自然ガイドを養成しています。すでに鳥、火山、植

物、島の魅力を伝えるガイドを実践しており、プロのガイドとして活躍する人も出てきています。将来はエコツアーを三宅島の産業にするための担い手として期待されています。

—— バード・アイランドの 話題づくり

①江戸家猫八師匠が自然ふれあい観光大使に就任

動物の鳴きまねで有名な猫八師匠は大の鳥好きで、ベテランのバードウォッチャーでもあります。三宅島ファンである師匠にお願いし、「自然ふれあい大使」に就任していただきました。三年連続で三宅島にお越しいただき、バードウォッチャーの注目を集めただけでなく、村民の野鳥への関心を呼び起こす効果もありました。

②日本野鳥の会が広報に協力

野鳥に関連して、さまざまな媒体への露出を意識して取り組んでいます。日本野鳥の会も三宅島の広報に協力をしていきます。発行部数五万部の会誌『野鳥』や、四〇万部のフリーマガジン『トリノ』などの媒体を使い、頻繁に三宅島の活動について発信、話題作りにも協力しています。

③バード・アイランドのイメージ浸透

毎年五月〜六月にかけて、「バードアイランド・フェスティバル」と銘打ち、アカコッコ館の朝五時開館や多くの

イベントなどを周知しています。三宅村ではバス停の標識のマークや航空路の再開時のラッピングにシンボルバード・アカコッコを使用し、移動中もつねに鳥のイメージを持てるように配慮しています。また大路池の看板やパンフレットにも「日本一のさえずりの小径」のキャッチを入れ、三宅島全体でバード・アイランドのイメージ浸透に努めて

■財団法人 日本野鳥の会

(1934年創設、会長：柳生 博)

野鳥や自然のすばらしさを伝えながら、自然と人間が共存する豊かな社会の実現を目指して活動している民間の自然保護団体です。どなたでも入会することができ、全国に5万人の会員・サポーターと、会員がつくる90の支部が、自然を守る活動を支えています。

1993年より伊豆諸島の三宅島で、野鳥や島の自然を守りながら活かす取り組みを、三宅村と協力しながら行っています。また2009年に迎えた創立75周年を機に、世界でも日本近海にのみ生息する絶滅危惧の海鳥カムリウミスズメの保護に積極的に取り組んでいます。

●問い合わせ先

日本野鳥の会（メディアグループ）

〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル

TEL/03-5436-2632 <http://www.wbsj.org/>

三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館

〒100-1211 東京都三宅島三宅村坪田4188

TEL/04994-6-0410

<http://www.wbsj.org/sanctuary/miyake/index.html>



三宅島の自然ふれあい大使に就任した4代目江戸家猫八師匠。



バス停の標識でもアカコッコに会える。

野鳥を守りながら 活用するために

います。

三宅島では野鳥を観光資源として積極的に活用し、バードウォッチャーを迎えようという機運が着実に広がっています。しかし野鳥での観光振興を図るなら、野鳥を守りながら活用してこそ持続可能な資源となります。そのためには村民に「島の野鳥は宝。自分たちが守る」という意識が必要でした。

そこで村民に島の野鳥を知ってもらう機会を増やし、野

■「カムリウミスズメ」を探してください!

カムリウミスズメは全長約24cmほどで、頭部に特徴的な3~5cmの黒い冠羽があります。洋上で見かけると、「チュイ、チュイ、チュイ…」などと鳴き、とてもかわいらしい鳥です。全世界での推定個体数は5000~6000羽、多くても1万羽以下とされる希少な鳥で、絶滅が危惧されています。日本近海の離島や岩礁でのみ繁殖しますが、繁殖期以外の時期にどこの海域で生息しているかはよくわかっておらず、広く目撃情報の提供を呼びかけています。

これまで寄せられた情報では、非繁殖期に三陸沖や北海道東部沖などで発見されていますが、まだ情報は不足しています。あなたの目撃記録が、新発見につながるかもしれません。航路や海岸などで見かけた際には、ぜひ情報をお寄せください。



■情報の送り先

観察した日時、およその位置、観察時の状況などを明記いただき、郵送、FAX、電子メールなどで以下までお送りください。

日本野鳥の会 会員室
カムリウミスズメ情報係
〒141-0031
東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル
FAX : 03-5436-2635
e-mail : media@wbsj.org
詳しくは当会ホームページへ
(<https://www.wbsj.org/form/nature/sw/form.html>)

三宅中学校の郷土
学習ではカムリ
ウミスズメがテー
マとなった。



鳥を守るために参加できる機会を拡充しました。カムリウミスズメの希少さや実態を知ってもらうために、島内全戸にカムリウミスズメの小冊子を配布したり、中学校の郷土学習で取り上げてもらいました。村主催でカムリウミスズメを守るための海岸清掃イベントも行いました。二〇〇八年からはアカコッコの生息数を調べる一斉調査を、村民ボランティアを募り実施しています。毎年三〇名程度が集まり、島のシンボルが現在どのような状況なのか、またどのように守っていけばいいのか、検討するためのデータ集めを村民自身の手で行っています。島の中で反響が現れはじめ、カムリウミスズメの保護活動に協力する漁師が増え、「自然ふれあい友の会」は独自に調査を始めました。磯釣りの祭典では、釣りマナー向上のための活動に協力要請も来るようになりました。島の野鳥や自然を守りたいという意識は着実に増えてきていると実感しています。

しのきひでのり
篠木秀紀

1975年福島県生まれ。日本野鳥の会サンクチュアリ室所属。大学時代は伊豆大島でカラスバトの研究をしていた。東京港野鳥公園、根室市春国岱原生野鳥公園のレンジャーを経て、噴火後の2005年より三宅島自然ふれあいセンターアカコッコ館に勤務。現在4代目チーフレンジャーとして、自然ガイドの育成などを手掛ける。

島の野鳥や自然を守ることは、法律があるからというだけでは十分ではありません。守っていくことは当たり前という意識を村民が持ち、資源を持続可能に使う文化を作ること。これが三宅島流の人と自然の共存なのだと思います。

これからも、 野鳥を活かした島づくりを

バードウォッチャーの増加、またメディアに露出する機会が増えたことで、土産物を扱う商店から野鳥を素材にした新たなグッズが企画販売されるなど、島内でも野鳥への関心がより一層高くなっています。またこの流れの強化のため、村長はいままで以上にバード・アイランド三宅島を内外にアピールすると村政方針で表明しています。広報に

努力している結果、島外からの問い合わせ、ツアーでの来島者も増えてきています。今後は自然ガイドや観光協会、商工会と横の連携を強化して、島一体となって三宅島型のエコツアー作りに取り組んでいきます。そして、これらの取り組みをきっかけに、より多くの村民が主体的に自然資源を守るしくみを作り、野鳥を活かした持続的な社会発展にとどまらず、特色のある伊豆諸島の島々と協力して、より大きな広がりをつくっていければ良いと思っています。

日本の島には、特色と魅力ある野鳥や自然が存在しています。島の魅力的な資源の一つとして、ぜひ野鳥に目を向けてみてください。どの島でも未来に大きな可能性があると思います。

みやけしま 三宅島 data

東京の南約180kmの太平洋上に位置する。面積55.40km²、周囲38.3km、人口2,794人（平成22年12月現在）。自然環境に恵まれ、バードウォッチングや磯釣り、ダイビングなどのスポットが数多く点在している。平成12年6月の雄山の噴火により全島避難を余儀なくされたが、同17年2月に避難指示が解除。現在も一部の地域は立ち入り禁止エリアとなっているが、自然環境を活かした観光事業に力を入れ、交流人口も増えてきている。

